

# わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

16期(1962/昭和37年)

## 恩師と仲間へ感謝

南宋の朱熹が編纂した「宋名臣言行録」に、諸葛孔明にも並び称される張詠が、「同期」について、次のように語っている。

「わたしの同期のものには、人材がとりわけて多い。なにごとにも慎重に対処し、人望が厚いという点では、李沆の右に出るものはいない。その深い徳をもって天下の人士を感服させることでは王旦に、また、君主の非をきびしく諫めてわるびれぬことでは寇準に、それぞれおよびあるまい。かくいう小生も、一軍の指揮をまかされれば、けっしてひげはとらぬつもりだ」\*

よき友として切磋琢磨し、互いを高め合う、いわゆる「同期の桜」である。「花の〇〇組」とも言えよう。

私は、同期である16期生を語るとき、この譬えを思い浮かべる。16期生からは、最高裁長官、同判事2名、また検事長や国務大臣等々を輩出しており、私は、素晴らしい同期生に恵まれたと、日々感謝している。

我々16期生は、先の東京オリンピックが開催された1964年に、実務家としてスタートを切った。50周年を迎えた一昨年は、未だ各方面で活躍している大勢の同期生が集まり、盛大に50周年を祝ったが、その席で、皆が互いに、頑張る次期の2020年東京オリンピック開催を迎えようと誓い合った。尚盛んな同輩の姿に、私自身も力を貰い、奮い立つものがあった。

振り返ってみれば、修習時代は、前期修習、後期修習ともよき師、よき友に恵まれた。また実務修習地は神戸で、神戸地裁、神戸地検、神戸弁護士会（現兵庫県弁護士会）の実務修習では、いずれも生涯尊敬出来る優れた指導者に恵まれた。時には近弁連内の



会員 平山 正剛 (16期)

大阪、京都、奈良、滋賀、和歌山修習の先生方と一緒に高野山で夏期合宿を行なうなど、切磋琢磨し多くの事を学んだ。後に私が日弁連会長選挙に出た際に、近弁連の全単位会で勝利を得たのも、当時ともに学んだ同期生のお力添えのお蔭と思っている。

修習時代は、受験生時代の法律知識は当然のものとされ、何よりも前提となる「事実」を大切にする教育が行なわれた。法文適用の前提となる事実認定のあり方、紛争解決のあり方に力点がおかれ、更に、法曹の使命は、「世のため、人のために尽くすことである」と強く指導された。その教えは未だ忘れることなく、日々立ち返るべき指針として深く心に刻まれている。

修習終了から52年を迎えてみると、私は、現在、「己の魂の生活と仕事の一致」を座右の銘に掲げて仕事に取り組んでいるが、これは修習時代に、指導教官はじめ、修習の先輩、また同期生に学んだことが、その礎となっているように思える。

冒頭に紹介した「宋名臣言行録」の外伝には、「春風の中に坐すが如し」という言葉もある。朱光庭が、程明道先生に教えを受けた時の感想であるが、よい教育の場にめぐり合えると、出来るだけ長くどまり学びたいとの気持ちが生ずる。よき師、よき先輩、よき同輩、よき後輩は、何物にも代えがたい宝であるが、私の修習時代は、この宝を得た、人生の土台となった時期であったと感謝している。

\* <引用文献>丹羽隼兵『宋名臣言行録』1995年 PHP 研究所 63頁